

教材・教具の紹介

小集団学習場面における特別な教育的ニーズのある児童の
情報伝達方法の調整を促すための支援課題

加藤 裕貴*・川住 文博*・戸澤なつみ*・大庭 重治**・池田 吉史**・八島 猛**

1 問題と目的

特別な教育的ニーズのある児童に対する支援においては、集団で学ぶことで生じる児童同士の良好なコミュニケーションが重要である。他者とのコミュニケーションは、話し手と聞き手の相互作用に左右される。特に、話し手は何かを伝える際、相手の理解状況に応じて伝え方を調整することでやりとりを成立させる必要がある。しかし、特別な教育的ニーズのある児童においては、他者理解の困難に伴う、聞き手の理解状況を認識し、情報伝達を調整することへの困難が指摘されている。

そこで、本研究では学習形態として小集団による学習場面を取り上げた。小集団学習場面は、「他者」と「事物」を意図的、計画的に組織できる場面であり、特別な教育的ニーズのある児童と周囲を結ぶ仲介者を配置することができる。このため、他者と交流する機会を保障する場として有効であると考えられている(大庭・葉石・八島・山本・菅野・長谷川 2012)。このような小集団学習場面における臨床的検討を通して、学習の場としての効果が十分に発揮される支援課題の作成が求められている。

本研究では、小集団学習場面を取り上げ、特別な教育的ニーズのある児童の情報伝達方法の調整を促すための支援課題を作成することを目的とした。

2 方法

1) 対象児

1~6年生の児童28名(男子18名, 女子10名)。読み書き, 算数, コミュニケーションについて特別な教育的ニーズの訴えがあった児童。コミュニケーションにおいては、他者を意識した情報伝達方法の調整に苦しさが見られた。

2) 作成した支援課題

大庭ら(2012)を参考にして主支援者MT(Main Teacher)と補助支援者ST(Sub Teacher)が関与する小集団学習場面を設定し、「迷子探し」課題への関与の状況を観察した。「迷子探し」課題は、児童の情報伝達場面を意図的に設定することができる課題であり、話し手と聞き手によるやりとりの調整を観察するための情報伝達課題のひとつとして設定した。

「迷子探し」課題は、児童が情報係と絵描き係にわかれ、情報係が絵描き係に対して見本の絵(Fig.1)の状態を言葉だけで説明し、絵描き係がそれを聞いてできるだけ見本通りの顔の絵を完成させる課題である。伝える顔のパーツについては、文字や図形など、児童らが知っていると思われる事物に近づけたものに設定した。また、伝える活動の後には、完成した似顔絵

を見ながら、解答用紙(Fig.2)の中にある顔の中から正解の迷子を探し出すことが求められた。活動は1グループにつき9名から10名の小集団を形成して行った。

課題の流れとしては、まず、役割決めを行い、絵描き係(2名)と情報係(7~8名)を決めた。情報係は、顔のどのパーツを伝えるかも決めた。そして、情報係は見本の絵を見て、担当の情報を確認し、絵描き係に言葉だけを使って絵の情報を伝えた。似顔絵が完成したら、MTに見本の絵を返し、引き換えに解答用紙をもらい、似た顔の子どもがたくさん示された解答用紙の中から正解の迷子を見つけ出した。

支援教材として、情報カードと言葉のヒントを用意した(Fig.3)。情報カードは、担当の絵を抽象的な言葉で説明し

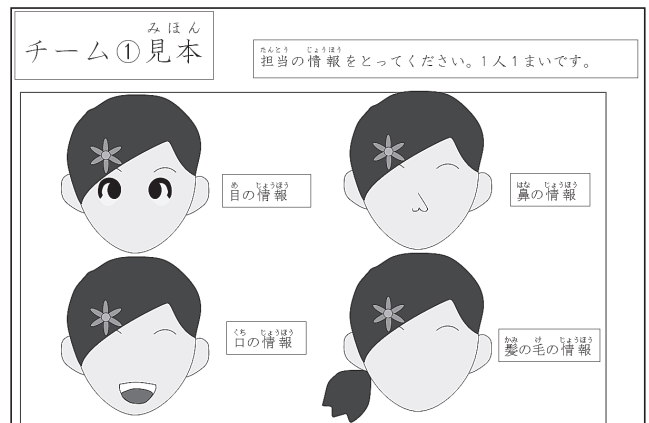


Fig.1 「迷子探し」に使用された見本の絵
実際の見本は彩色されている



Fig.2 「迷子探し」に使用された解答用紙
実際用の用紙は彩色されている

* 上越教育大学大学院学校教育研究科特別支援教育コース

** 上越教育大学大学院学校教育研究科



Fig.3 情報カード（上）と言葉のヒント（下）

たもので、伝達の開始に用いた。言葉のヒントは、担当の情報を具体的な事物に言い換えた言葉のリストであり、見本の絵と共に設置した。

3 結果と考察

「迷子探し」の活動を通して、「鼻はひらがなの『ん』の逆」や「それを右向きに描いて」など、一度伝えた内容を別の言葉で言い換えたり、更に情報を付け足したりする情報伝達の調整が活発にみられた。特に注目すべきことは、聞き手の児童が具体的な質問を行わなくても、話し手の児童が積極的に調整を行うことができた点である。聞き手の児童が描画を行う課題であったため、聞き手の理解状況が認識しやすく、情報伝達方法を調整する必要性を意識することができたと考えられる。

調整には自分で考えた表現への調整、言葉のヒントに示された表現を使った調整、他児との相談により得た表現への調整の大きく3種類のタイプがみられた。また、言葉のヒントを見ながら同じグループの児童が相談を行い、その中で、「○○って言ったらわかるんじゃない？」という発言も聞かれた。一方、聞き手が理解できていないことを知り、情報伝達方法を調整しようとしても、自分の力だけでは情報を伝えるための言葉を上手く引き出すことができない児童も存在した。そのような場合には、言葉のヒントを使用することにより、絵の状態を表現する言葉を自分の語彙の中から引き出すことができた。また、情報係が分担して似顔絵を伝える手順をとったことで、児童にとって課題全体の達成度が認識しやすい状況が作られた。そのため、まだ伝達が終わっていない児童に対してアドバイスをするなど、児童同士がお互いの情報伝達の様子に注目し、他児との相談やアドバイスによって調整が促された。

以上のことから、特別な教育的ニーズのある児童の情報伝達

方法の調整を学ぶための支援課題は、まず伝達相手である聞き手の理解状況が認識しやすく、調整の必要性を意識しやすい課題であることが必要である。また、話し手の児童の語彙を補う支援教材や、調整方法に関する他児との相談をしやすい活動形態を設定することも重要である。以上のような支援課題を実施しても情報伝達方法の調整が見られなかった児童においては、特に聞き手の様子を意識できるような更なる課題の改善を図り、その効果を検証していく必要がある。

付 記

本研究の内容は、上越教育大学特別支援教育実践研究センター主催「第4回特別支援教育実践研究発表会」においてポスター発表により公表した。また、研究の一部は、上越教育大学研究プロジェクト（一般研究）による助成を受けた。

文 献

大庭重治・葉石光一・八島猛・山本詩織・菅野泉・長谷川桂 (2012) 小集団を活用した特別な教育的ニーズのある子どもの学習支援. 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 18, 29-34.